
第 1 章 吉野作造記念館の開館まで

第 1 節 地元での顕彰運動の始まり

吉野作造記念館の建設は、戦後長らく吉野の生誕地・古川で継続されてきた顕彰運動がその出発点にある。ここではまず、吉野の顕彰運動が戦後どのように始まったのかを見ていこう。

吉野が亡くなって 12 年が経った 1945（昭和 20）年、第二次世界大戦に敗戦した日本は連合国軍による占領下で民主主義の国として新たな道を歩み始めた。そうした中、かつて日本に存在した民主的な時代——大正デモクラシーの時代を生きた人々の脳裏には、その象徴というべき吉野の名が思い起こされた。

1950（昭和 25）年には、東京にいた吉野の教え子たちが中心となり「吉野博士記念会」が設立された。同会では吉野の関係者への聞き取りなどと共に、様々な顕彰活動を進めていった。

吉野の故郷・古川でも再評価への動きが起こり、1956（昭和 31）年には大学講師の尾花重雄らにより「吉野作造先生記念事業の会」が結成され、旧志田郡役所（現大崎市役所）を利用した記念館構想が提起された。吉野ゆかりの品々を展示することでその思想と業績を末永く顕彰しようとする意図のものだった（『河北新報』1956 年 5 月 21 日、夕刊）。

さらに 2 年後の 1959（昭和 34）年には、「吉野作造先生生誕 80 年記念講演会」が池田哲郎（福島大学）、相沢源七（古川高校教諭）らによって企画された。相沢源七はさらに教職員組合の大場恒一、成田恒男らと相談し、平和を守る会（大内嘉雄会長）の高橋永吾に話を持ち込んだ。平和を守る会には高橋源一（医師・古川市教育委員長）宅に集まって下準備を重ね、さらに古川史研究会（佐々木忠雄、三浦茂雄ら）や書店主の永澤喜一も加わった。同年 10 月 9 日に第 1 回の講演会準備会があり、大場恒一、成田恒男、佐々木忠雄（古川高校教諭）、三浦茂雄、永澤喜一らが出席、発起人として高橋源一、祇園寺信彦（東北大学助教授）、相沢源七、佐々木忠雄が名を連ねた。さらに高橋源一を委員長に講演会の実行委員会を立ち上げた。

この講演会には各地域紙も注目して機運を盛り上げた。『仙北新聞』は鈴木安蔵や河村又介らのほか、小坪洋（古川高校校長）、相沢源七、尾花重雄、祇園寺信彦、永澤喜一らの吉野論を掲載して市民の関心を高めた。また、『大崎タイムス』は鈴木政雄による「吉野作造先生と明治文化全集」を掲載し、地元にも優れた吉野研究者がいたことを示した。吉野正平（作造弟、栃木県鹿沼市在住）が浪人会との立会演説会（1918〈大正 7〉年）に臨んだ際の吉野の気概を語

った談話を含む、「きょう吉野博士講演会——会場には遺著遺墨を展示」と題した記事も掲載された。

こうして1959（昭和34）年12月15日、地域で初めての吉野に関する講演会「吉野作造先生生誕80年記念講演会」が開催された。池田哲郎「クリスチャン吉野作造」と田中惣五郎「吉野作造とその時代」の2本の講演が中心で、朝からの氷雨やみぞれにもかかわらず、午後6時からの講演会はホールが満員の盛況だった。会場となった公民館ホールでは、吉野作造の遺品・遺墨・著作など23点も展示された。

当日のパンフレットを見ると、古川市内の民間諸団体や市長、商工会会長などが名を連ねた、官民上げての講演会であったことがわかる。吉野について理解の深い古川市内の人々、特に学校教諭ら実行委員会の呼びかけにより、講演会は成功裏に終わった。この講演会の実行委員会は、翌1960（昭和35）年に「吉野碑建設委員会」へ発展解消して、後述する吉野作造記念碑建設運動として継承された（『仙北新聞』1960年1月8日）。

この他に、1957（昭和32）年には古川高等学校の創立60周年記念文化祭で、文芸部が「吉野作造博士関係図書展」を開催した。展示は吉野の関係書籍を中心に、河村又介、新明正道、鈴木安蔵の寄稿文などもあった。当時の高校生が市民や学校内外の見学者に、郷土が生んだ大正デモクラシーの先覚者・吉野作造を紹介したことは、地域の郷土史教育の上でも非常に重要な出来事だった。

この頃、陸前古川駅プラットホームの南

側に、古川に関係した人物の複製肖像画の立て看板が設置された。剣豪・千葉周作、俳優・大森暁美と吉野で、肖像画は地域移住民から旅行者も含め、多くの陸羽東線利用者の眼にとまり、意識されるようになった。この肖像画は古川市西館在住の画家・横手広吉の作品で、石田俊雄、葛西純一、今泉茂樹の協力により郷土古川を広く発信したいとの思いから描かれた。この立て看板の原画は後に吉野先生を記念する会に寄贈され、現在は吉野作造記念館で所蔵されている。

第2節 吉野先生を記念する会の誕生

「吉野作造先生生誕80年記念講演会」成功の2年後、1962（昭和37）年10月に吉野先生を記念する会が発足した。講演会を成功させた高橋源一と尾花重雄が代表を務める平和を守る会と、三上健児（元古川小学校長）や吉野の助手であった武田常吉らの会が大同団結したことによる。岩崎英夫（古川市議会議員）、尾花重雄、高田健夫（消防団長）、高橋源一、武田常吉、千葉房一郎（古川商工会議所会頭）、保科良治（古川市議会議員）、三上健児が発起人となり、次の案内状が配布された。

日本の民主主義の唱道者、吉野作造博士の偉大なる業績を讃え、その遺志を承けて後進のため、ここに市民総意を結集し博士を記念する事業を起こそうとする次第であります。よって発起人総会を開催いたしますから、何卒御出席くださいますよう御案内申し上げます。

翌 1963 (昭和 38) 年は吉野没後 30 年にあたり、副会長・尾花重雄の随筆「吉野先生を偲ぶ」が『大崎タイムス』に 7 回にわたって連載された。3 月 23 日には古川市公民館で金沢規雄 (仙台第一高等学校教諭) による講演会「若き日の吉野作造とその時代」も行われた。また、翌 1964 (昭和 39) 年 2 月には、青年時代の吉野をモデルにしたドラマ「晩鐘」が NHK テレビで放映され話題となった。

古川学人吉野作造之碑の建立 初期の吉野先生を記念する会による活動として「古川学人吉野作造之碑」の建立がある。建立にあたっては地元古川市民に幅広く寄附を呼び掛けるという方針がとられた。小中学生や家庭にも呼びかけ、記念する会役員が一軒一軒の家庭を訪問し、趣旨を説明し寄附をお願いして歩いた。街頭募金も行われ、古川市長・森谷菊治郎も呼び掛けに直接加わり、記念碑の建立運動を盛り上げた。

寄附金呼び掛けに際して作成されたパンフレット『古川学人によせて 吉野作造先生』には、趣意書の他に池田哲郎「吉野博士と現代」、尾花重雄「吉野博士のことども」、永澤喜一「神田・南明クラブ (吉野博士と右翼)」と、吉野の遺稿集『古川餘影』から「家庭教師を頼む親の態度」及び吉野の略年譜が収録された。趣意書には、吉野先生を記念する会会長・森谷菊治郎 (古川市長) を始め、高橋進太郎 (宮城県知事)、島野武 (仙台市長)、片山哲 (元首相、吉野博士記念会)、星島二郎、石川清、嘉治隆一、河村又介、蠟山政道なども連名するなど、県内外から多くの賛同を得て建立計画は進

められた。

広範な地域の団体・個人から寄附金が集まり、記念碑建立は実現した。碑の設計・デザインは古川市在住の彫刻家・牧恒夫、ブロンズ鑄造と碑文 (河村又介筆一資料編 3 所収) 製作は齋藤素巖 (吉野四女・秀の夫) が担当した。題字「古川学人吉野作造之碑」は長谷川如是閑の揮毫による。除幕式は 1966 (昭和 41) 年 11 月 27 日、古川市民会館前広場 (現大崎市民会館) で行われた。吉野家からは作造長女・土浦信、三女・小松光子、四女・齋藤秀夫妻、五女・三島敬、長男・俊造ら各氏が出席したほか、県内外から 300 名の参加し、俊造長女・雪子氏がテープカットを行った。除幕式後には、古川市民会館で石川清 (吉野博士記念会) による講演「吉野博士の業績と東京吉野会」も行われ、市内高校生も参加した。なお、この記念碑は吉野作造記念館の開館にあわせ、記念館前に移設されている。

吉野文庫 (古川市図書館) の設置 1969 (昭和 44) 年には古川市図書館に「吉野文庫」が、吉野先生を記念する会の永澤喜一事務局長の尽力によって設置された。永澤は 1949 (昭和 24) 年 10 月に、石巻女子高校 (現石巻好文館高校) で矢内原忠雄の講演を聴講した際、矢内原から吉野の生家はどうなっているかと訊ねられ、「吉野」が誰を意味するのか咄嗟に分からず答えに窮したという。こうしたことから永澤は、書店経営をしながら吉野に関する書籍などを収集に取り組んでいた。

「吉野文庫」は永澤が収集した吉野の著作や研究文献 32 点を基礎に、その後は 167 点

にまでその数を増やした。1974（昭和 49）年には、吉野文庫の蔵書や関連写真を収録した『目で見ると吉野作造—大正デモクラシーの先覚者』を刊行し、吉野の人と業績をわかりやすく紹介した。

1978（昭和 53）年 5 月に古川市図書館が改装された際には、吉野家から寄贈された吉野自筆の墨書や遺品、齋藤素巖製作の小胸像も加わり、吉野作造博士資料展示コーナーとしてリニューアルされている。

第3節 様々な周年事業

生誕100年 吉野作造生誕百年にあたる 1978（昭和 53）年には、地元紙が吉野の誕生日 1 月 29 日前後に特集を組んだ。『大崎タイムス』は 1 月 28 日の記事「吉野作造博士「生誕百年」記念事業準備進む」で、「大正デモクラシーの花ひらく」と題して「戦後、民主主義を基調とした国の政治体制の実現は、博士が生涯を捧げ標ぼうし続けた主義主張が正当な評価を受けたと言える」と書いた。また、『河北新報』は 3 回にわたり祇園寺信彦の連載記事「追憶吉野作造生誕百年」（1 月 7 日、24 日、31 日）を掲載した。祇園寺の父大亮は吉野の弟正平と交友があった。

この年の 6 月 24 日には新明正道（東北大学名誉教授）を講師に招き、吉野作造生誕百年記念講演会が古川市役所 4 階ホールを会場に行われた。演題は「吉野先生と大正デモクラシー」だった。新明は東京帝国大学法科で吉野の指導を受けた人物で、吉野の門下生グループ新人会の元会員でもあり、この頃には日本社会学の重鎮だった。さらには新人会の後輩にあたる仙台市長・島野

武のブレイン的存在であったともいう。講演会の後には児童や市民によるコーラスの発表もあり、また古川学人吉野作造之碑のレリーフ（齋藤素巖作）を基にした記念メダルも製作された。

没後50年 生誕百年から間もなくの 1983（昭和 58）年は没後 50 年にあたり、再び顕彰事業が行われた。『河北新報』は 1 月 1 日地域版で「吉野作造をしのぶ 没後 50 年」の特集を組み、一面では古川学人吉野作造之碑の写真が大きく掲載して吉野の生涯と業績を紹介した。二面以降では、地元古川の太友為三郎による回想「いつまでもふるさとの光」を基に関係者による座談会などが組まれた。座談会では祇園寺信彦、佐藤房子（吉野家家政婦）、渋谷真紀（会社員）、永澤喜一、平地茂樹（古川市図書館職員）、牧恒夫（彫刻家）が吉野について語り合った。

また、吉野先生を記念する会では「没後 50 年、吉野先生をしのんで」と題した講演会を企画し、祇園寺信彦を講師に七十七銀行古川支店ホールで開催した。さらには没後 50 年を記念した特製はがき 2 千枚を製作・販売した。

この講演会をきっかけに吉野について学習しようという機運が起こり、山家稔を会長としたコミュニティ研究会が「吉野作造先生を知る勉強会」を開始、祇園寺信彦を講師に祇園寺宅で週一回、吉野の論文を読んだ。勉強会参加者は記念する会にも加入するという熱の入れようだった。その参加者の中に、当時『大崎タイムス』の記者であった伊藤卓二氏がいる。後に氏は「大崎

の先駆者たち」をメインテーマに、古川出身で吉野の旧友である千葉豊治の生涯を追った著作『天開の驥足—千葉豊治物語』（大崎タイムス社、1987 年）を上梓している。

またこの年、古川在住の門脇耕が吉野の肖像画を描いて市教育委員会に寄贈した。門脇は旧制古川中学校（現古川高等学校）で祇園寺信彦の同級生で、東京の川端美術学校で学び帰郷した。この肖像画は現在、吉野の母校である古川第一小学校の校長室に掲げられている。

民本主義70年 1986（昭和 61）年は吉野が論文「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」で「民本主義」を提唱してから 70 年の区切りの年だった。吉野先生を記念する会は、東京大学教授の三谷太一郎氏を講師に招き、「民本主義の歴史的意味」と題する講演会を開催した。三谷氏は 1974（昭和 49）年に『大正デモクラシー論』で吉野作造賞を受賞し、翌 75 年には『吉野作造論集』（中公文庫）の編纂にあたるなどしていた。

同日には高校生による記念弁論大会も開催され、会場の古川商工会議所は幅広い年齢層の聴衆で満員になった。会場では「古川銘菓 民本主義」も販売され、記念行事を盛り上げた。当時、吉野先生を記念する会会員も 160 名を数えるなど、市民の間における吉野への関心は非常に高まっていた。

また、民本主義 70 年の画期に始まった重要な顕彰運動として、『吉野作造通信』の創刊がある。創刊したのは吉野先生を記念する会事務局長・永澤喜一の弟で、当時宮城学院中学校・高校に勤務していた永澤汪恭

である。永澤は同僚の一戸富士雄と協力しながら 1983（昭和 58）年には吉野の関係者からの聞き取りなどを始めていた。大友為三郎、三浦茂雄、渋谷栄太郎、三春重雄といった吉野を知る宮城県内の人物からの聞き取りは貴重な歴史の証言になった。この成果を広く世に伝えるために創刊されたのが『吉野作造通信』である。発行にあたっては宮城県歴史教育者協議会の佐藤弘友も協力し、吉野作造関係資料や関連文献、研究書の紹介、あるいは吉野作造研究者からの寄稿も掲載した。『吉野作造通信』は現在でも発行が継続されている。

この他特筆すべき動向としては、古川ロータリークラブが 1988（昭和 63）年 5 月、古川市十日町の吉野作造生家に解説付き案内板を設置している。吉野生誕時の家は 1908（明治 41）年の大火で焼失しており、家自体は当時 2 代目のものだったが、作造の従弟・達三夫妻が相続していた。この後生家は道路拡幅工事のため 1993（平成 5）年 8 月に取り壊され、現在は吉野ポケットパークとなり吉野に関する案内板が設置されている。

第4節 吉野作造記念館の建設へ

建設計画の始まり 市民の間での顕彰運動の高まりと相まって、古川市においても新たな動きがあった。1985（昭和 60）年 12 月の古川市議会では、佐々木謙次議員が大衡照夫市長に吉野の顕彰に対する市の考えを質し、吉野作造記念館の建設を提案した。佐々木は祇園寺信彦を講師とした吉野作造の勉強会に参加していた。対して大衡市長

は吉野先生を記念する会の会長でもあったが、このときは顕彰活動の意義を認めつつ、市民による顕彰活動を市として援助していくという姿勢を示した。1987（昭和 62）年 12 月の古川市議会定例会でも吉野先生を記念する会会員でもある佐々木登久男議員が吉野生家の保存や記念館建設、また遺品等の資料収集について質問をしたが、このときも大衡市長は同様な姿勢を示している。

しかし、1990（平成 2）年の古川市誕生 40 年を記念して記念館設立の機運が起こって来る。『大崎タイムス』では同紙社長・米城清司氏と対談した本間俊太郎宮城県知事が、大正デモクラシーの先駆者である吉野の顕彰は重要で、地域を盛り上げる意味でも記念館建設を県として支援する用意があると語った。同年の古川市議会では市政施行 40 年記念事業が議題になり、「吉野作造記念文化ホール建設基本計画委託料」として 500 万円が計上された。千坂侃雄市長は施政演説で、古川が生んだ先達・吉野作造の偉業を称え、副県都にふさわしい市民文化興隆の基盤となり町のシンボルとなり得る「吉野記念ホール（仮称）」の建設を進めたいと述べた。同年 9 月 14 日の市議会総務常務委員会では吉野作造記念会建設委員会が設置され、委員長に中川孝治郎（古川市議会総務常任委員長）、副委員長に吉野先生を記念する会事務局長の永澤喜一のほか、狩野寿一（商工会議所副会頭）、西村秩（市農協参事）、石川栄喜（西古川農協参事）、米城清司（大崎タイムス社長）、高橋永吾（記念する会理事）、米城一善（記念する会理事）、伊東隆（市教育長）、黒羽根與八郎

（市総務部長）、佐々木博隆（市建設部長）の各氏が加わった。さらに建設委員会の下には市職員、県職員、記念する会会員などによるワーキンググループが設けられ、委員会の仕事を支えた。

翌 1991（平成 3）年度には、市の年度予算に記念館建設準備事業費 4,430 万円が組み入れられた。同年 2 月の定例市議会では千坂市長が 1993（平成 5）年の開館を明言。設置場所は市内荒雄公園に定まり、座席 200 から 300 席の記念ホールを併設、床面積 2 千平方メートルで、予算総額 7 ～ 9 億円との見通しを述べた。千坂市長はその後の市議会定例会でも、荒雄公園と江合川周辺一帯の整備事業の一環として記念館建設を推進していくとして、古川市や宮城県だけではない、国際的な文化価値の発信拠点となる記念館を作りたい、あるいは市民の文化交流・学びの場として吉野塾開設や吉野賞創設、郷土に関する学習や社会教育の実践、学校教育との連携など、多面的な取り組みを計りたいと説明した。

1992（平成 4）年度には建設委員会で建設計画の概要が承認された。その内容は、展示室、情報センター、研究室を備えた二階建てで、当初見込みから 1 年遅れて 1994（平成 6）年度の完成を目指すとされた。また、和室・茶室・能舞台・会議室を擁するふるさと創造センターも併置するものとされた。さらに特別顧問として矢野暢（京都大学教授）、学術顧問に三谷太一郎（東京大学教授）、顧問として嶋中鵬二（中央公論社社長）、祇園寺信彦（東北大学名誉教授）、参与として大嶽秀夫（東北大学名誉教授）、

千葉眞（国際基督教大学教授）の各氏が任命されている。

顕彰活動の盛り上がり 1990（平成2）年5月、吉野作造の母校・古川第一小学校の正門前に、古川市教育委員会により吉野作造の説明板が設置された。なお、説明板の隣にある細川松三郎頌徳碑は、小学校時代の吉野もその指導を受け、町の教育向上に尽力した元古川小学校校長・細川松三郎を顕彰するため、1918（大正7）年に吉野や三浦吉兵衛らによって建立されたものである。

1990（平成2）年には官民双方で吉野作造記念館建設に向けた様々な事業が実施されている。9月4日には吉野先生を記念する会主催でフォーラム「大正デモクラシーと民主主義の今を考える」が開催され、祇園寺信彦による基調講演「明治憲法と吉野作造の民本主義」の他、永澤汪恭「吉野作造と古川」、米城一善「大正デモクラシーの歴史的背景」、高橋永吾「民本主義と市民生活」の報告が行われた。市民団体フォーラム21（真船寿子代表）では永澤汪恭を講師に「古川の生んだ国際人 吉野作造」（10月20日）、「青年吉野作造 よき師よき友との出会い」（12月1日）と題した連続学習会を行った。永澤を講師とした学習会としては、古川商工会議所青年部でも11月20日に「実業家吉野作造 その人と仕事」と題した講演会を行っている。また、宮城県古川教育事務所主催によるフォーラム「大崎の歴史、文化に学ぶ」（12月1日）のパネルディスカッションでは祇園寺信彦が吉野について語った。

翌1991（平成3）年5月4日には、21世

紀懇談会（座長・西澤潤一東北大学総長）が古川市で開催され、副座長の矢野暢が「吉野作造 その思想と継承について」と題した基調講演を行った。また、地域産業創造センター・ササニシキ資料館では、古川市教育委員会と吉野先生を記念する会の共催で、吉野の遺品資料（衣類、カバン等）や写真を紹介する企画展示が開催された（6月18日～9月29日）。さらに1992（平成4）年1月29日の吉野生誕日には、古川市、大崎行政事務組合、吉野先生を記念する会の共催によるフォーラム「21世紀に向けた大正デモクラシー 吉野作造先生の時代先見性を語る」が開催され、吉野の長女・土浦信と長男・俊造も出席している。このフォーラムは三谷太一郎による基調講演「民本主義と人間吉野作造」など充実した内容で、市民約400名が参加して記念館建設の機運を高める上で大きな意義があった。

この他、1992（平成4）年3月には東北電力古川営業所が、壁面を利用した「おだえがわぎゃらりい」に、「古川と吉野作造博士」をテーマに吉野の写真と色紙を掲示した。9月には、古川ライオンズクラブが創立30年記念事業として、佐藤一郎東京藝術大学助教授による吉野作造肖像画を古川市に寄贈した。佐藤一郎は、古川市七日町の佐藤呉服店の出身で、初代当主の利助は吉野の父年藏と同じ店で共に奉公した縁があった。

1993（平成5）年1月26日にはササニシキ資料館で企画展「吉野作造とその時代—大正期の女性」（古川市教育委員会主催）が開催されている。自治体として実施した事

業には、他に古川市・古川市教育委員会・吉野先生を記念する会の共催で、1992（平成4）年から3年連続で吉野の生誕日前後に実施した古川21フォーラムがある。このフォーラムは実質的に、1995年（平成7）1月29日に開館する記念館事業に直接連続していく講演会となった。

『大崎タイムス』の報道 吉野の顕彰活動における地元紙『大崎タイムス』の役割は特筆すべきものがある。1947（昭和22）年の創刊から牽引した米城祐一社長と豊岡忠編集局長が、顕彰運動草創期から報道や紙面提供を行ってきた。1951（昭和26）年2月には、作造弟・正平の回想「兄作造の思い出」を上下2回に分けて連載し、戦後民主主義の進展について古川在住の吉野親族の声を発信した。

1990年代に記念館建設の構想が具体化されてゆくと、『大崎タイムス』でも積極的に記念館への期待が報じられた。1990（平成2）年3月29日の社説「吉野博士記念館への期待」など、節目ごとに記念館建設に向けた様々な提案を行うとともに、古川市民への啓発活動の推進を訴えた。没後60年にあたる1993（平成5）年には、土浦信（作造・長女）「父の思い出」、千葉基（古川青年会議所理事長）「吉野先生と政治改革」、阿部晋治（栄堂社長）「銘菓「民本主義」、永澤汪恭「古川学人 故郷に帰る」、梶村慎吾（賛育会後援会事務局長）「吉野博士と賛育会」と各氏の寄稿が掲載された。

翌1994（平成6）年には、小学校長であった阿部林治の18回にわたる「みんなでつくろう吉野先生のブロンズ像」の連載があ

った。この連載は、吉野と古川の関わりについて聞き取り調査を基に執筆したものである。

開館前の資料収集等 古川市から資料収集活動を委託された吉野先生を記念する会は、会としての独自活動を続けながら資料収集に努めた。この頃に吉野家から寄贈された遺品資料として、袴、着物、ズボンプレスサー、座り机から色紙、未公開写真2点（長男・俊造から）、コーヒークップ（長女・土浦信から）、吉野の肖像の掛け軸（作造弟・五郎の長男・東樹から）等がある。また、遠縁にあたる瀬戸勝枝氏から、東京帝大入学時の援助に対する御礼として、吉野から贈られたカバンが、また渋谷栄太郎長男・栄和氏からは、作造がたびたび訪れた渋谷家の庭の絵が寄贈された。さらに、地元古川市内の人々からも、吉野に関係する歴史資料や記念館建設に向けた寄附が多く寄せられた。

このように、市内外また県内外、そして吉野作造親族・関係者も含めた多くの人々が、古川市が行う吉野作造顕彰活動に期待し、信頼した結果として、今日に至る多くの記念館所蔵資料が収集されたのである。これらはいずれも、郷土の先人であり、日本の民主主義社会の発展に貢献した大正デモクラシーの旗手・吉野作造の精神と功績を後世に伝えるものであり、市民共有の貴重な財産である。その保存・活用を担う文化的な責任と名誉は、現在でも合併自治体である大崎市とその市民とが協働して引き受けてゆくものとなっている。